

プログラム

- プログラム:
- 全体司会・進行係: 安黒務氏、ビデオ収録: KBI神学生
- 10:00-10:30 受付: 昼食申込(一般500円、学生 350円ー当日受付にて申込下さい)
- 10:30-10:50 開会 KBI神学生賛美リード・歓迎のことば: 大田裕作氏
- 11:00-12:00 基調講演 市川康則氏 (50分講演、10分質疑応答)
- 12:00-13:00 昼食 理事会
- 13:00-14:00 研究発表 20分発表、10分質疑応答を一会場2本。発表者多数の場合会場を増設する
- 14:00-15:00 応答講演 青木保憲氏、横田法路氏、遠藤克則氏 各20分講演 司会: 正木牧人氏
- 15:00-16:00 質疑応答 進行: 正木牧人氏
- 16:00-16:20 総括、献金、閉会 瀧浦滋氏

★ 現在、分科会での研究発表者を募集しています。西部部会の会員の方であれば、どなたでも応募することができます。

★ 応募要項

- ◇ 発表希望者は、コーディネーター長のあぐろまでメール等で問い合わせ・申し込みをお願い致します。
- ◇ 発表希望者は、発表テーマと発表概要をお知らせください。
- ◇ 第一次締め切り: 8月31日
- ◇ 発表当日には、20-30名分の発表レジュメ(A4用紙、1枚から4枚程度)を各自ご準備・ご持参ください。

アクセス

電車で来られる方

- ◆ 生駒まで
近鉄難波から快速急行20分
近鉄西大寺から快速急行10分
- ◆ 生駒駅から
近鉄生駒ケーブルで一駅「宝山寺」駅下車 徒歩約5分
徒歩約30分/タクシーで約5分

車で来られる方

- ◆ 第二阪奈道路 老分から15分
- ◆ KBIには広い駐車場があります。

交通案内



日本福音主義神学会西部部会
2013年度秋期神学研究会議
第一回案内状
& 分科会研究発表者募集

2013年11月18日 10:30-16:30

関西聖書学院(KBI)

* 入場無料・自由献金あり

福音主義神学の基盤を点検する — 今後の営みに向けて —

TESTING THE FOUNDATION IN EVANGELICAL THEOLOGIES,
IN THE CONTEXT OF PAST, PRESENT AND FUTURE



KBIチャペル: ガリラヤ

〒671-4135 兵庫県宍粟市一宮町安黒332
安黒務(コーディネーター長)

電話: 0790(72)0235, FAX: 0790(72)0235

電子メール: aguro@mth.biglobe.ne.jp

- ◆ 九月中旬発送予定の文書版の「第二回案内状」には、分科会研究発表者と研究発表主題を掲載させていただく予定です。
コーディネーター: 瀧浦・正木・安黒

〒630-0266 奈良県生駒市門前町22-1
Tel.0743-70-8600, Fax.0743-70-8601
HomePage: <http://www.kbiwave.com>
Mail-Address: kbi-ark117@ares.eonet.ne.jp

主題の趣旨説明

解説: 正木牧人(コーディネーター)

福音主義神学の基盤

福音主義神学は聖書は神の言葉である、という主張に基づいて創立された。創立当時の研究会議や学会誌で討議されていたのは、啓示論であり、正典論であり、聖書の無謬性、無誤性についてであった。福音主義は自由主義神学への対抗勢力として結集したものである。信仰告白からの解放をうたった自由主義神学は、聖書の成り立ちについて、人間の歴史のなかで合理的に説明できる過程としての解明を追求した。これに対して福音主義神学は聖書の十全靈感を信じ、聖書のみが教えと生活の唯一の基準として権威ある神の言葉であるとしている。

秋期研究会議主題設定の背景とめあて

1970年代までの創立期から40年余が経過し、神学的営みの視点にも課題にも変化が見られる。今回の研究会議で達成したい目標は、私たちは次世代に福音主義神学を受け渡していくにあたって、福音主義神学の「聖書は神の言葉である」という基盤について再び明らかにすることである。歴史の中で神学的営みの課題が変化していることに目を奪われて基盤が曖昧にされたまま引き継がれることがないように留意したい。そこでこの目標のために、二点が明確に議論されなければならない。

- ① 「聖書は神の言葉である」という福音主義神学創立期の基盤が当時の文脈と共に再確認されること
- ② 「聖書は神の言葉である」という基盤が、神学的

営みの課題が福音主義創立期とはかわってきた今日と今後の文脈の中で、神学会の営みの基盤として再認識、再構築されること

主題の背景の解説: 聖書神学の動向を例に

神学的営みの視点と課題の変化について多くを語ることができると思うが、ひとつの例を聖書神学の部門から見てみる。近年は聖書成立史への関心ではなく、聖書テキストが用いられ読まれた共同体の中での聖書のはたらきや意義についての文脈的研究に重きが置かれている。すなわち、神学的営みは通時的な関心から共時的関心に移行してきた。聖書神学の分野でのこの傾向は神学の他分野にも影響を与えている。

成立史研究の中での聖書テキストの役割は、考古学や聖地周辺文化の研究などにより聖書の成り立ちを追求する際に一定の仮説を立て検証するための指標としての役割である。分類し細分化したテキストの断片を緻密に研究し、あとで成果を統合して全体像を見ようとする方法論が取られた。一方、共同体の中で用いられた聖書テキストの機能や意義についての研究では、聖書テキストは分断するのではなくペリコーペ全体として取り扱われる。部分の総和を全体と見るのではなく、テキストが内容の進展によって作り出し伝達する独自の世界観を探る研究であり、テキストを共有する共同体を支配する価値観がどのようなものであり、どのように共同体を組み立てて継続させているのかを探る研究である。後者の研究には聖書成立を巡る違った立場に立つ者であっても、それぞれが首尾一貫した論理性を

もって作業することを尊重し合う約束のもとに、共同研究が可能であり、研究成果は共有される。自由主義陣営と福音主義陣営はそれぞれの立場を尊重しながらも、同じ聖書テキストを巡る研究についての洞察や成果を交換し、神学研究は前進している。

2013年度秋期研究会議の重要性と成果の期待

日本福音主義神学会西部部会は活動の主役を次世代にバトンタッチしようとしている。このときに、今一度、福音主義神学の土台を再点検することは、今後の営みのために有意義であり、不可欠であると考えられる。神学の関心が聖書成立史的なものから共同体での役割や意義の研究に向かって徐々に移ってきた経過を体感的記憶によって辿ることのできない世代にとって、福音主義陣営の定義は神学的基盤よりも人的ネットワークとなっていないか。あるいは福音主義陣営のボーダーは「聖書は神の言葉である」という神学的基盤をもとに見極められることよりも、特定の神学的課題に対する取り組みの角度が一定の範囲に収まることをもって判断されていないだろうか。今後の営みのためには、再度、今日の文脈の中で福音主義神学が「聖書は神の言葉である」という基盤を持つことを確認し、自由主義陣営とは研究課題は重なっていても基盤が違うことを認識する必要がある。次世代の神学徒が堅固な基盤を意識的に受け継ぎ、神学会が議論を深める場として更に充実したものと成長してほしい。秋期研究会議での基調講演に大きな期待を置くものである。